

目次

巻頭言

革命—今日それは何を意味するか

1

私の紹介—中国・アナキズムの影

三浦精一

2

述懐

陣内剛

9

海外だより

12

野火

13

編集室

16

巻頭言

十一月十七日フォード氏が羽田空港に降り五千人の警官と三千人の活動家に迎えられ赤坂パレスに入った。ジャーナリストは黒船以来（一八五四年）と宣伝したが彼等はマッカーサー將軍の占領期間を忘れたのだろうか。ある意見は充分に卒直だった。「日本は小国です。おいでになりたい大統領を拒否する必要はありません。どの国とも交友的でありたいのです。」民衆は翌日の国鉄ストを心配し、実際その日は半日ストが実施された。更に保守的雑誌「ブンゲイシユンジュ」が火を付けた田中氏の金脈問題がある。彼は地位を利用して国有財産を自分の幽霊会社「スタッフ」や労働者のいない会社「へ安く売り財産を作った」と非難されている。彼の資産は主として別荘と土地であり、野党とジャーナリズムはその公開を要求し、ミニウォーターゲート事件として騒わがれている。フォード大統領歓迎の舞台裏でタフな男、田中氏のために時は熟していた。彼の外交的功績をもってオトコの花道が実力者達とザイバツによってしつらえられたのである。何故彼は失脚しなければならぬのだろうか？ 考慮すべき幾つかの点がある。インフレの責任をとらされたのだろうか？ インフレなら世界的現象である。過日の選挙で得票数の落ちこみの責任だろうか？ それも疑わしい。

はつきりしているのは彼の感受性を欠いたバイタリテイがある。別言すれば金を集め配分する方法が党のイメージダウンにつながると忌避されたのだ。日本人のエチケットによれば金銭の授受は例え貸す場合でもセンスがなければならぬ。田中氏はそれを公然とやったのだ。彼を閣内から追放した別の動機があると思う。それは社会における官僚制の強化だ。成功談のヒーローである田中氏は、日本の官僚的、管理社会ではアウトサイダー「またはちん入者」だった。人類学者「ベネディクトの「菊と刀」の説明を援用すると、彼は日本の社会内で自分の居場所を知らない（身分をわきまえない）、それ故自分のバイタリテイで失脚しなければならなくなったのである。彼はコンピューター付のブルトーザーと仇名されていた。この後、誰が首相になるのだろうか。その人は前首相佐藤氏のような官僚派でありDLPの実力者内から選出されるだろう。そして日本の社会は（倫理的意味で秩序のない）「アナキ」でありつづけよう。

— 莫空人 —

革命——今日、それは

何を意味するか？ (2)

ヨーロッパ某国の社会主義者

新しい社会——社会主義（社会民主主義とは全く関係ないという条件で）あるいは共産主義（国家資本主義のボルシェヴィズムとは全く関係ないという条件で）であろう。——そこには、階級がなく、威圧的な国家機関がなく、国境もない。工場や事務所、土地などは、コミュニティ全体によって所有され、そのコミュニティの徹底的に民主的な管理のもとに存するものでなければならぬ。そこでの生産手段が、政府によって管理されないのは言いまでもないだろう。全人民を代表すると公言する人達や、労働者の政府と自称する人達によって管理されるのではない。（とにかく、ここでは、社会の他の「労働者でない」階層から区別される労働者階級なるものが存在しないのだから。）人間は、資本主義下の多くの人々がおちいっている状態、すなわち、賃金のために自身を売ることによってのみ生存することができるといふ状態の中で、すり減らされていくべきではないのだ。新しい社会では、人々は、賃金のために強制的に働かされることはないであろう。なぜなら、そこにはもはや、

人々と彼等が消費したいと望む物との間に立ちほだかる「価格」という障害物が存在しないのだから。男も女も子供も、自由に、彼等が欲しいと思ふものは何でもただで取ることができなければならない。その物を買うだけの金銭的余裕があるかどうかという恐れ（資本主義では、すべての労働者の生活をおおっているこの不安）に、つきまとわれることもない。すなわち、新しい社会は、次の原理の上に打ち立てられなければならないであろう。「それぞれの能力に応じて」から、「それぞれの必要に応じて」へ。

社会主義あるいは共産主義社会の荒けずりを概観を描くことは、もちろん他のさまざま論点——このようない小文では追求できなかったのだが——を呼び起こすであろう。例えば、資本主義の多くの支持者たちは、社会というものは、我々がさし示したような方法では運営されえないと主張する。これらの人々から我々がよく聞かれる反対論の一つは、賃金制度がもたらすところのいわゆる刺激無くして、いったい誰が、どうしても為されなければならない不愉快な又は危険な仕事をするのだろうか、というものである。何らかの等差ある賃金というもの無くして、いったいぜんたい誰が、たとえば下水の中で働くのだろうか。炭鉱にもぐっていくのだろうか。

まことに、このような議論は、しばしば更に一段階進んで、すべてがただであるような社会では、人々は働くだろうか、ということになる。誰も彼もが、指一本動かすのすら拒んで、完全な怠惰のうちに坐りこむのではないだろうか。そして、消費製品の貯蔵は急速に底をつき、社会は混乱のうちに崩壊するのではないだろうか。ということは、男、女、子どもたちは——人々の必需品を制御する価格制度という形式なしには——消費主義のバカ騒ぎの中で簡単に狂暴になってしまふということが、信じられていたわけである。そして我々はよく尋ねられる。誰も彼もが、彼自身の飛行機を要求し、誰も彼もが、自分の家を黄金やダイヤモンドで飾りたてたくないのでないか、と。

共産主義への反対がこのような形をとることは、全く驚くにあたらない。なぜなら、それらはまさに資本主義思想の反映なのだから。資本主義が習慣的に擁護している一連の愚かな偏見、仮説、思考の反映なのだから。結局のところ、大部分の人々を少数の階級（いうまでもなく、資本主義社会において、生産手段を管理しているのは彼等なのだ）に依存しなければならぬような状態においておくために、「今の条件がとりはずされれば、人々は怠けて働かなくなる」と主張することより有効な

弁明がありうるだろうか。あるいは別の例を挙げよう。（人間の必要を満足させるために生産を拡大するよりも、むしろ）市場がどれだけ吸収できるかを考えて生産を人工的に制限していくために、人々の注意を、資本主義下で生産を左右している不合理な優先権の問題から、ばかげた考え（欠乏は人間が多すぎるために存在するのだ。すべては、いわゆる「人口問題」なのだ、というように考え）へ、人々の注意をそらせることより有効な方法があるだろうか。前述したように、ここでは、これらすべての論点をとりあげるスペースがない。その上、「リベラルテール」の多くの読者は、資本主義のための口実を見つけようと懸命になつていて人々によって為されるこのような議論の固有の弱さについては、すでに十分気づかれています。これらに触れることは、意味のないことではないように思われる。

その一、彼等が我々との議論で社会主義に反対するとき、いつも繰り返される一つの題目について考えてみよう。すなわち、人間は社会主義において働くには、あまりにも怠惰で貪欲であるということ。だが、これは彼等が考案した人間の性格に対する完全な固定観念なのだ。多くの証明がある。資本主義社会においてすら、人

間は必ずしも一様に、資本主義支持者らが信じている「人間性」という規範にくみ入れられるわけではない。もっとも、我々は次のことを認めるにやぶさかではない。すなわち、資本主義社会の労働には、資本主義の支持者たちが熱心に、「怠惰」とか「貪欲」とかいうレッテルを貼るにふさわしいような方法をもって、労働者たちが戦わなければならない要素がたくさんあるということだ。たとえば、賢明な労働者で、彼の仕事の重荷を増やそうとする上役の絶え間のない努力に、反抗しようとしないう者がいるだろうか。あるいはまた——すべての労働者は、人間として必要なものを絶えず満たされない生活に慣らされているのだから——幾人かが、それらが満たされる機会が到来した時に、彼等が得られるすべての物を貪欲につかみ取るうとふるまうのは、驚くべきことだろうか。今日あるがままの社会を支持している人々がおちいりがちなクセは、これら何人かの人々の反応を、資本主義の中で見つけられる現象のワックミ入れ、それを、すべての人々がいかなるタイプの社会でもそのようにふるまうと決めてしまうことである。このような問題のとりあげ方がどんなにバカげているかは、自明であろう。社会人類学者や他の人々によって集められた実に多くの資料は、人間の性格についての固定した型は、疑いなく一つ

もないということを我々に証明している。人間が行動する方法は、完全に、彼等が属しそれに反応している社会に因っているのだ。言い換えれば、アメリカのホッピー・インディアンや南アフリカのカラハリ砂漠のブッシュマン人によって「正常」と考えられている習慣や態度は、ウォール・ストリートの株式仲買人やクレムリンの官僚にとつては、全然「正常」ではないのである。(資本主義の中の人間の行動を基盤にして)社会主義は社会を運営していく方法としてはダメであると議論するのは、非科学的であるばかりでなく、全くバカげたことだと言えるであろう。

第二の点は、「能力に応じて」から「必要に応じて」へという原則は、一九世紀以来、多くの革命家を鼓舞しつづけてきた夢にすぎないのか、ということである。一九世紀(そして二〇世紀初期においても)その原則は、たしかに夢にすぎなかった。資本主義社会に挑戦した人々々が、どんなに純粹にこの原則を実行に移そうと努力しても、そのうちの何人か現実的な人は、人間はその必要を十分かつ豊富に満たすだけの生産手段を持ち合わせていないことを認めないわけにはいかなかった。このよりの状態のもとで為される最大のこととは、はるかな未来のいつか、「能力に応じて」から「必要に応じて」の

原則にもとづいた社会をもたらしすべき理論的立場を、ひたすら保ち続けることであつた。そして一方では、予測されうる未来の不可避の欠乏の問題に、多かれ少なかれ「民主的」な解決を見い出そうと努めることであつた^⑦。そのうちの一つの「解決」とは、人々が為した仕事にに応じて発行される労働券の案であつた。しかしながら、今日、このような案の便利な点と不利な点について議論することは、学問的興味以外にはあまり意味がない。なぜなら、人類は、将来可能であろうと想像されえた豊富さから、現実的に豊富なのだという状態に、急速にそしてすでに到達したからである。しかし、この「豊富さ」は、資本主義社会では生産が市場に拘束されている故に、決して実現されないであろう。

我々は現在、この地球という惑星のすべての老若男女の衣食住を満足させることのできる技術的能力を有している。そして、単にそればかりではない。資本主義社会に存在するいかなる物よりも遙かに優れて快よく能率的な輸送機関をととのえること、そしてまた、「日本人、アメリカ人、ロシア人、中国人などというものは、もう存在しないのだ。我々はみんな一つ世界の市民なのだ」ということを、きっぱりと理解させるに十分な通信設備を用意すること、それらはすでに人間が簡単に手のとど

るところにあるのだ。資本主義社会で見られるようなひどく醜いものではなく、人間によく適合したレジャー設備もまた我々は設計することができるのだと、私はほとんど言いかけたほどだ。しかしよく考えてみると、資本主義が故意に作りあげた「働くこと」と「レジャー」の間の柵は、共産主義社会では、もはや存在しないだろうと思う。とにかく、私はここで、今日、技術的に何が可能かを、ほんの一部、指摘したにすぎない。日日の生産技術の進歩に感謝しよう。昨日の夢は、容易に、今日の実現しうる可能性となった。——そして間違いなく、それは明日の現実なのだ。

しかし、もしそれがそうなら、一体どうして、その事をもっと広く認識されていないのだろうか。これに対する主な理由の一つは、資本主義世界では、生産方法はいずれにしても一様に発展していないということだ。洗練された高度な生産技術が存在する一方では、インド、中国、南米などで、話にならないほど遅れた方法が採られているのである。人間が技術的に到達できるある種の社会というものについて考えさせる高度な生産方法は、地球のある部分(主に、北アメリカ、西ヨーロッパ、日本)にだけ集約されている。これら以外の地域に住む人々に、高度な技術が人類に開いている好機を、鋭く感じ

とるように期待するのは、現実的には無理であろう。しかし、それ以上に大事なことがある。いわゆる先進国においてすら、豊富な世界をもたらすような方法で社会を再組織する可能性が存在することに気づいている労働者は、ごく少数なのだ。なぜそうなのか、はなはだ理解しにくいことである。思想の形成、思考法への影響に最も決定的な時期は、我々の大部分にとって、幼年期から成人初期であろう。この重大な形成の時期における労働者階級（先進国においてすら）の大部分の経験について、ちょっと立ちどまって考えてみるなら、やがて我々は容易に理解できるであろう。なぜ、豊富を実現するために存する可能性が、たとえどれほどでも、労働者の意識の中に浸透していかないのかを。

北アメリカ、西ヨーロッパ、日本において中年及びそれ以上の労働者の全世代は、第二次大戦前の年々、しばしば身を切るような苦難と貧困という状態のなかで成長したのであった。（私が一番良く知っている）ヨーロッパでは、この世代の労働者の多くは、今なお、当時の不景気、大量の失業者、飢餓行進などの鮮やかな思い出につきまといわれており、それらの思い出は現状を測る基準となっている。非常に低い一連の基準。多かれ少なかれ、規則的に働き口があり、空腹を満たし、雨露をしのぐ屋

根があること。それは彼等の若き日々に較べれば、はるかに良い状態ということになる。これに続く世代（少くとも西ヨーロッパ、日本において。この点について北アメリカはちょっと違うのだが。）についても同じことが言えよう。彼等はその幼年、青年期において、戦争にもなつて起り、戦争直後にも続いたあの絶望的な貧困を経験したのである。これら労働者が数世代にわたつて経験した「不足」はあまりにも強烈だったので、彼等の多くにとって、真正の「豊富」という概念は、彼等の想像を越えるものなのである。⑧資本主義社会が与えている取るに足りない賃金とけばけしい仕掛けを越えて、彼等の視界を、豊富をそして市場の束縛から解放された社会へと向けはじめることができるのは、先進国労働者のごく最近の世代にすぎない。彼等はそれまでの世代とはいくらか異なつた環境で成長した。しかしながら、この最近の世代においてすら、生産手段の発展とそれが開いている可能性が、労働者の思考に入り、彼等の世界のイメージの一部分となる速度の間には、まだ避けえない時間的ズレが存する。それでもなお、我々は、ある若い労働者によって保たれているある考えは（たとえば「ヒッピー」はその顕著な例）、我々革命家にある程度の樂觀を与えると言いえよう。

しかしながら、もしも、資本主義に根本的に疑問を持つような考えが先進国の労働者階級においてすら非常に貧弱に展開するなら、それは私にひとえに次のことを明らかにするのである。すなわち、重要なことは、我々革命家は我々の仲間である労働者の間に資本主義への疑問を喚起させるために、できることのすべてを為すことによつて、資本主義への挑戦を保ちつづけなければならぬということである。社会主義の根本的とは全然関係のないような日々の闘争に明け暮れる一方で、商品生産が「結局は」撤廃され、すべての生産が自由に消費されるべきだという理論を心の片すみのどこかに単にしまつておくこと——それは私にとって、革命家であることを意味しない。この一九七四年、私にとって革命家であるということは何を意味するか。それは、我々のすべての活動の焦点が、貨幣、賃金、価格のない新しい社会のために宣伝し煽動すること、そして資本主義市場に反対すること、に置かれるべきであるということだ。もちろん、私は、いかなる場所いかなる時にも出かけていって、「賃金廃止」「賃金廃止」などと会う人ごとには言いつづけることが、革命的活動として十分である、などと言っているのではない。ヨーロッパにおける革命的グループが最も深く悩んでいる問題の一つは、未来の共産主義社

会の概念を、労働者が資本主義の中でまきこまれてくる実際の闘争に、どのように関係づけていくかということである。この問いをめぐつて続けられている論争を通じて——特に一九六八年のバリ事件につづく近年において——我々はある程度の進歩をなしたと公言できると思ふ。問題はもちろん今もなお解決されたとはいえないが、実は、これが、なぜ我々が同じ志向を持つ日本のグループまたは個人と対話をもちたいと思つたか、という理由の一つである。「賃金撤廃」ということを永遠に叫ぶだけが革命的活動の最終点ではないけれど、この小文を書きはじめたそもその論点にもう一度もどるなら、真の革命的闘争の第一の肝要点は、資本主義社会の存在に疑いをもつことであること、我々はやはり認識しなければならぬと思う。市場と賃金制度がその中核をなしている資本主義社会に疑いをもつこと。それを認識しないなら、我々は革命家としての活動の第一歩すらも踏み出していないことになるであろう。

A · B · C ·

注

①この小文中の「労働者階級」という用語は、財産所有

がわずかであるために、その精神的または肉体的労働力を、生きるために売ることを余儀なくされている人々すべてを意味する。故にそれは単にブルーカラーの工場労働者だけでなく、ホワイトカラーの労働者、病院、学校、運輸関係に従事している人々も含み、さらに、ふつり「知識人」とされている人々（たいてい不正確に）の大部分をも含む。

②「それ故、ソヴィエト政府は、経済的条件に強いられ、それ自身、資本主義の典型となった。」ドイツ労働者共産党（KAPD）一九二一年。（このKAPDは、モスクワと提携したドイツ共産党KPDと完全に違り組織であった。）

③「トロツキーもスターリンも、彼等の綱領を、ロシアで優勢である国家資本主義と個人資本主義のワクの中で作成している。」英国社会主義者党（SPGB）一九二八年。（このSPGBは、当時も、そして今もなお、英国労働党とは完全に異なる組織である。）

④私は別の小論で、西ヨーロッパの真正の革命伝統を維持してきた人々の理論にもとづいて、ロシア、中国を、資本主義国（もっと正確には国家資本主義国）として分析したいと思っている。

⑤もし商品生産が維持されるならば、この状態はそう長

くは続かないだろう。そして、市場における競争は、確実に、国家と新しい支配階級の再現をもたらすであろう。

⑥この小文中の「社会主義」と「共産主義」という用語は、完全にどちらでも同じ意味で（実にこの二つは常にそうあるべきなのだ——ボルシェヴィズムの実践にかかわらず）使われている。

⑦これは意図されるものではなく、また、一九一七年以後のボルシェヴィキの政策の正当化として、とられるべきでもない。レーニンとその支持者たちによって結局採られた「解決」（NEP）は「民主主義」などというものではなかった。彼等に優先したあのバカげた「戦争共産主義」とは、権威主義の政権による軍需品の強制徴発にすぎなかった。同じ状態に直面した他のどの資本主義政府でも採るであろうと思われる政策と同じような政策が、彼等によって採られたのである。見せかけの共産主義的言いまわしにもかかわらず、ボルシェビズムはその始めから、主に農民社会に優勢であった条件に見合せて採用された資本主義革命運動がだったのである。

⑧私がここで行なつたすべての一般化には、多くの個人の例外があることを、私自身、十分理解していることを、あらためて申し添えておきたい。

私の紹介

『中国アナキズムの影』 (1)

（玉川信明著）

三浦 精 一

戦争中、私も山東省の青島市で暮らしていた。一九三九年十月から、終戦で引揚げた一九四五年十二月までだった。華北航業総公会の調査科に勤務していたことが、古代史を勉強しようとする私にとって、どんなに大きなプラスであったことか、今もなつかしく思い出す。シナについての貧弱な知識しかなかった私は、少しずつ勉強して行く過程で、日本人がいかにシナを知ろうとせず、知りもしなかつたかを、しみじみと知らされた。いくら毛沢東に心酔しても、彼を生み、彼を育てたシナの土地や、その土地の上に何千年も生き続け、営みが続けた民衆と、その民衆が形成した宗教や思想、広い意味での文化の構造を理解しなければ、毛沢東崇拜は単なる日本人式な英雄崇拜でしかないだろう。だから一政治家としての毛沢東が、マルクス・レーニン主義あるいはスターリン主義を採用するにあつても、政治家と、土に生き土に帰る数千年の農民との異質性をよく知っているはずだ。そこに彼の政治の特徴がある。

X

第一章と第二章で、前史として、アナキズム、シナにおけるその基盤、そして老子から近代までの反乱とその源流、大同思想について博学な玉川君は実に要領よくまとめ上げていて、その底に流れる独特のユートピズムを首肯させてくれる。そして狂疾の世界で国際的な影響を受けながらテロリズムを執行する人々の中に、春秋時代以後のニヒルを刺客の伝統を見ている。そして章大炎のニヒリズムとそれにつらなる魯迅にふれて結んでいる。第三章と第四章で、中国近代アナキズムが主として日本とフランスへの留学生によってもたらされたこと。さらに日本のアナキストとの交流をあつかっている。

日本でもシナでも、近代政治思想としての立憲国家主義、民主主義、社会主義、無政府主義など、すべてが欧米からの輸入思想であることに間違いない。こうした輸入思想に対して、そうした考え方が昔から存在していたと考える国粹的な行き方もある。

日本に來た留学生たちが触れた幸徳や大杉の思想も、クロボトキンやバクーニンを祖述したもので、日本が中継地となつたものである。しかし、それがわれわれを動かすのは、その思想のもつ普遍妥当性である。留学生たちがアナキズムに触れたとき、彼等はこの普遍妥当な思想の実現の可能性（革命）を考えている。玉川君はそ

の一人の言葉を引用している。「中国の政治は、放任を重んじ干渉を重んじない。名は專政といいながら、実は人民に親まず、人民は官吏を信頼せず、法律は空文に過ぎず、官吏は空位に等しい。一人として真に権力を持つ者はなく、真に法を遵守する者もない。・・・それ故に世界の無政府の実現は、中国がもっとも容易であり、中国が最初となるに違いない」。

民衆の現実から浮上った一人のインテリ学生という言葉であるにしても、シナでの政治の実状をよく表現している。国家と社会の分離したシナ、国家は為政者として社会に何ら政治的保護を与えず、社会も国家に何の期待を持っていない。民衆は政府にソッポ向いているといったシナの姿を知れば無政府主義の表現は、まずシナにおいてと考えるのも当然だ。国家の権力支配がわれわれの生活のすみずみまで滲みこんでいる日本という小さな島帝国では国家と社会を混同する傾向もあり、こうしたことは理解しにくいことでもある。

日本留学とともにフランスへ多くの留学生が行って、ここでもアナキズムに触れて、シナのアナキズム運動の主流を形成した。フランスでの留学生たちの互助的な生活の一端は、芹沢光治良の「愛と知と悲しみ」の中に描かれている。

述 懐

何故生まれるかは生物学者の、生きるとは何かは宗教家の暇に任せるとして、私は「生まれたからには愉快に暮らしていきたい。」と思いつけている。パン略流の半日労働半日余暇でよいと思う。先の事は先に進んだ時、もっとよく解るだろう。

少なくとも、人間相互の無権力共栄を目指す者ならば「行動が一致すればマルキストとだって共闘する。」とは言わないはずだ。プロ独政府樹立の視点からその行動を提出する者との力の平衡関係を結ぶ事は、いくら字面が同じ××打倒であっても不可能な事だ。同時に、無政府主義を名のる者同士の共闘にも充分な注意がある。全部が全部、天皇制解体であるとはかぎらないからである。マルクス主義者間のような思想点検―資本論等の暗誦合戦―ができないだけに、相手も自分もアナキストといっているからすぐさま手を結べるとの速断は、禁物である。それゆえお互いを検証する手段として、時間を多く費やすだけで内容の稀薄になりがちな顔合せ会Vを頻発させる事になる。それすら個人の人格をもっぱら頼りにしている趣きがある。連合をレーニン党派への勢力誇示の

アナキズムを受け入れる態度、受け入れかたの違いについて、玉川君が触れた点は注意すべきであろう。対比してそれを書いているのではないが、受け入れたアナキストの態度について書いているのを読んで、私自身が対比的に考えざるを得なかったのである。国情の差とすることがあるにもせよ、幸徳などの場合、多分に志士的に見える。知性的だった大杉は政府の酷しい弾圧の下で行動的にアナルコ・サンジカリズムへの摸索や実践もやり、石川さんはキリスト教的実践からアナキズムへの道が拓かれている。三人三様だが、シナのアナキストたちの場合、テロリズムに走った者もいるにはいるが、多くの場合ストイックな道徳的な実践をその特色としている。その代表的な一例としては、山鹿泰治君と深い関係のあった師復である。心社を結成した彼は十二ヶ条の誓約を設けた。1、肉を食わない、2、酒を飲まない、3、煙草をすわない、4、下男下女を使わない、5、かごや人力車に乗らない、6、結婚しない、7、姓名をつかわない、8、官吏とならない、9、議員とならない、10、政党に入らない、11、陸海軍人とならない、12、宗教を奉じない。このように厳格な道徳を実践しようとする。そしてアナキストらしく規則や罰則はつくらない。

陣 内 剛

ために（あたかも中央集権国家に対してマルキストがミニ国家―中央集権党をもつてくるように）とにかく作ってしまおうという思考では、物量の大きさが正しさの証明であるとする現在の政治を凌駕する事はできないだろう。企業労働者達は、インフレに見合ひ賃上げになれば生活の苦しみは解消すると信じ貨幣存在そのものまでには、疑問をはさまない。学生連中は、大学生活は、しばし自由とばかり眼を閉じ耳をふさいで麻雀に励んでいる。見回す社会には、そんな人間ばかりで革命の機運とは、ほど遠い。今は自ら一人が無政府主義者であり続けようとするしかないのだ。それは決して絶望的ではないのだ。なぜならあなた自身も、そうあり続けるに違いないのだからだ。

エンリコピルでの定例活動紹介

② 共学読書会（第二、第四日曜日午後一時より夕方迄）

③ エスペラント語学習会（毎週水曜日午後七時より）

東京都大田区西蒲田7の61の4（七三五）一二四六
国電蒲田駅より徒歩3分

『海外だより』

☆11月16日付フリダムでG・ウッドコックが「チョムスキーのアナーキズム」と題して投稿している。60年代のウッドコックはアナーキズムを離れていた由だがここではゲランとチョムスキーに噛みついた。ハチョムスキーはアナーキズムを経済レベルでの実際の闘争方法とする。それでは19世紀の産業レベルで古くさくなったアナーキズムだ。彼はバクーニンを褒めるがゲランと同じで(固定した自閉的方式)の対置物としてみているのだ。ウッドコックはアナルコ・サンジカリズムだけでなくマラテスターが60年前に指摘したように(現状で奴隷化されている全人類の完全な解放)こそがアナーキズムだと述べ、例としてリードの教育方面の業績、スペイン革命での農民のコミューンをあげる。要するにチョムスキーとゲランは(マルクス主義が第一義で、アナーキズムからはマルキストの教養で矛盾するものの解消に資するもの)だけを選びだす。よってマルクシズムの強化を計りアナーキズムを戦術化するだけだVと結んでいる。チョムスキーはデカルト派の言語学者で彼のアナーキズム論は明晰だけどもみるべきものは少いというのが僕の意見だ。

☆ローザンヌのCIRAから機関紙28が届いた。英・仏・独・ス・伊語の書評がでていて、書誌的には最高水準で

野火

『非暴力直接行動』(WR I 日本部機関誌 準備号1、2、3号)

WR I (戦争抵抗者インター)は、一九二一年に創立された、戦争に抵抗する有力な国際組織である。つぎの『公式宣言』を承認すればどんな組織でも加盟できる自由な連合体だという。

「戦争は、人類に対する犯罪である。それ故われわれは、どんな種類の戦争をも支持しないことを決意し、戦争のすべての原因の除去に全力を傾注することを注意する。」

さて準備号の内容は、ともかくWR Iの活動を紹介することを目的とし、WR Iから送られてくるニュースレター・レポートの抄出要約した記事がほとんどである。これによって、世界各地のさまざまな問題に取り組んでいるWR I本部の動きは、フランス、イギリス、アメリカなど各国の諸団体の闘争の一端を知ることができる。WR I日本の活動として注目すべきは、水爆実験被害下にあるミクロネシア・ポリネシア住民の問題を積極的に取り上げていることと、日本の現状にそった「非暴力直接行動」のいろいろを戦術をつくり出そうとしているこ

ある。ここではスーシーの「ランドワのロマン的ソシアリズム」を要約する。スーシーはオイゲン・ルシのランダウワの伝記を評価し、グスタブ・ランダウワ(一八七〇—一九一八)は哲学的文学的精神と社会革命・党派的精神の二個をもっていたと言ふ。ランドワは既に一八九三年に小説(死の予知者)を出し、一八九六年には(労働者階級の自由への道)を書いた。更に一八九五—九六年には「社会主義者」を出しこの新聞は一万部に達した。翻訳ではホイットマン、ワイルドを紹介し評論にシェクスピア論がある。彼はドイツの民主社会党派からアナーキズムに移り、クロボトキンを訳した。ミュンヘンではクルト・アイズナ大統領兼首相を助け、アナーキストエリッヒ・ミューザムと組み、一九一九年四月の革命では学制改革に貢献した。当時ボルシェビキに対する彼の評言は「ボルシェビキは軍事体制によってこれ迄の世界で嘗てみない程の誤りを犯している」と指摘した。ランダウワは四月十四日戒厳令下の兵士に銃の台座で撲殺された。スーシーはこれを(非暴力の使徒が暴力的に生を終った)と述べ、更にロマン的との語は適当でなく、彼はクロ・ブルドンと同じく真理の基礎に立つて居る(ランダウワの社会主義はヒューマニストのものであり倫理的であつて、決してロマンチックではない)と結んでいる。

とである。そのひとつとして、九月十五日東京、十六日広島で行われた韓国の政治犯釈放のための仮装デモの経緯をとりあげている。東京では、民青学連事件の被告を模して、五五人が青い服を着て縄につながれて行進し、人々の注目をあびた。広島では、朴大統領に扮したデモ指揮者の演技が、警察の規制を先取りし、これを茶化して、デモ(示威)を効果的にした。編者はこれを「自分の土俵で自分のやりたいとき自分のルールでやる状況」をつくり出すものとして評価している。

日本の平和運動の課題は、一言でいえば、安保体制、つまり日本が組み込まれている米国の核戦略体制と日本の軍事大国化に対して戦うことである。自衛隊の海外派兵や徴兵制の可能性さえ強まりつつある現在、「非暴力直接行動」によって取り組むべき諸問題は、数えきれないほど存在している、といえる。純粹のアナキストの全国組織をつくることよりも、反戦運動のような民衆の運動の具体的な状況の中で、反権力・自由連合の理念を實現してゆくことがより緊急に必要ではないか、と私は考えている。WR I日本の今後の活動に期待する。(江藤)

△WR I日本部——姫路市亀山三五四・向井孝方
なお、京都・大阪・川崎・東京・市川にWR Iのグループがある。

☆岩佐太郎著作刊行会から「古今貫大道」というリーフレットが5号迄でた。通読して感じるのは余の公平な編集振りだ。その意味は必ずしも岩佐ベッタリノサイドではないらしいのである。特に大山君の反論を収録するなど寛容の精神が溢れ好感がもてる。例えば「幸徳のフロックエートを着たアナキズム」なる珍語がある。冗談にしては酷だ。あの筆者は大杉の「モダニズム」にも反感を寄せ、「民族的 アナキズム」を造語しているが、現代の第三世界の趨勢といわゆる個人主義の誤用を視野に入れると右の発言はかなりの信ぴょう性を獲得するだろう。だがカールシュミットの言説では「政治的ロマン主義者」が行きつく所は「人類」と歴史「V」がそうである。つまり主観的に抱きついた「民族」が個人的な感性で色あげされるとどうなるか「その一つの答えは岩佐の「国家論大綱」にでている。また岩佐の労働観が論点とされていたが、あの岩佐説はパン略を頂点とするアナキストの考えを少しもでていない。重要なのは個々の言説につまづかず余分なセイ肉を削り落して真摯な研究が望ましい。幸徳・大杉に対する過分なき「ほうへん」(毀誉褒貶)の中に例え逆説的にせよ岩佐を追加してはいけない。彼の厳しく自立していた晩年の倫理観は、多分高村光太郎に接近したものがあつた筈である。

の態度は、そのまま私達を圧する法の姿勢である。人間が他の人々の上にたち支配しようと欲する時、発する「法律」という道具は私達の何一つ合意もないままに生活を規制して行く。支配を欲する者等「政府がある限りそれが民主的・革命的な冠しようとも、人々の産みだす利益を自己の下に集中し、それを正当化するための「法律」を他人におしつけ従わない者を弾圧する。「法律」は決して人間にとつての当然の約束ではなく、誰かがいつのまにか作りあげ私達に「従え」と命じている文章にすぎない。それは文章化され教えこまねばならないものであるゆえに、私達の生活には何一つの役にも立たず、圧迫と害悪のみを無限に与え続けるものなのだ。

警察国家完成のための刑法改訂阻止を全ての法律文章の廃棄を射定距離に置いて戦い、機会あるたびに各集会やピラに接し、具体的な警察国家化現象を摘発してその結果をリベルテールへの投稿として共有したいと思う。

かねて大分市の百華苑に入苑していた荻野寛英氏は病氣のため九月二十五日死亡いたしました。生前中の御交誼を感謝すると共にお知らせいたします。

全ての政府は法律をデッチあげ人々におしつける

甲斐

支配する者共が、自分達に都合よく作りあげたくみを固定維持させる道具の一つに「法律」がある。軍国主義化以上に巧妙な管理体型として、狡猾な政府は警察国家化を目論んでいる。すでに着手されているそれは、地域毎のパトロール強化、交番設置、防犯連絡所の増加、指名手配ポスターの増刷及宣伝、さらに刑法そのものの改訂へと進んでいる。無灯火のパトロールカーの深夜徘徊は深夜歩いている人自身の安全のためによりもそんな時間に出歩く者は「犯罪を犯そう」としていると疑うにたる相当な理由のある「者」として不審尋問するのが目的といつてよいだろう。それは悪がしこい事に何らかの違法(ともいえないくらい)の事をさせてから連行拒否のできない現行犯であるとして呼びとめる形になってきている。例えば、酒を飲んだの帰り道、酔いにまかせて自民党のポスターをはがしたりするが、それを目撃した後もさらに何か(共産党のポスターをはがす、立小便等)するまでパトカーの徐行で尾行し周囲に他の人のいないような場所に来てから、軽犯罪法現行犯として不審尋問・持物検査をする。

何をしても許される権力をもっているとはばかりの警官

「リベルテール」継続購読のおねがい

リベルテール誌はこれ迄、特にカンパ要請、誌代納入についての訴えを控えてきました。けれど経済原則の貫徹は容赦なく本誌を豊い、直接参画者の無報酬、無償の美德も痛撃して余りあるのです。むしろ本誌は読者諸兄姉の主張、ご意見を当りさわりなく披露して、寸志を得るとか、広告媒体として手数料を戴くことはしていません。そうではなくて各人の日常茶飯事としてのアナキズム踏まれても蹴られてもアナキシーな生き方しかできないと一少くとも現状で「知覚する同志の方がたの感情・意志・思想発現の場となり、知見を深める機縁として共有されるのを熱望しています。そこでお願いしたいのは、本巻(第六巻)第1号以後発送名簿の整理をいたしますから未払の方は別紙振替その他適宜な方法で一年(千円)の購読料をご納入下さるかまたはご意見をお寄せ下さい。返事ない場合は名簿更新後発送を中止することにいたしますのであらかじめご承知下さい。

一九七四年は暮れなずんでいます。来るべき年は七〇年代の後半に入る起点として、諸兄姉の活動を期待します。

☆「気をつけよう甘い言葉と暗い道」夜道の一人歩きは痴漢ばかりでなく、権力末端装置の好奇心もそそるらしい。「ちょっとお話でも。」から「一緒にそこまで。」という甘いセリフはひとたび拒否に会えば、おどしに変じ、男はみんな狼よ。深夜一番、自つきの悪いのが、うろつく犬共自身とは皮肉な事ですな(甲斐一)

☆朝目がさめた。布団の中から起きようとして寒いのでためらった。布団の中で僕は思う。――庭の広い家にいるやつらは寒くても飛び起き、手足をのばし、体を暖めることが出来る。貧乏人がそうもいかず、寝起きが悪く、なまけ者といわれるのはわりがあわないな。

貧乏人は通常の社会秩序の中では努力だけでは自分の欲望を実現することができない。でもいいや。口では貧乏人と同じように金持ちだって努力だけでは自分の欲望を実現することができない、と自分に言い聞かせよう。短足の金持ちだっているんだ。苦笑。(肉体は居住空間によってその成長を左右されるってほんとかな。)

山本 二夫

Otamasan is a woman singer who stands at every door of a village-town to sing a song and obtains a small money. One day she has been invited at a big restaurant to sing before six play boys of Hatamoto, i.e. the retainers of the Shogun. In those days, the caste indicates Otama-san to sit in the court of the restaurant even to sing a song before the gentlemen. In a sense of a westerner, she is a gypsy girl, but in Japan, a singer, an actor and actress have been regarded like a beggar, a homeless wanderer and oppressed so far as to be deprived their lives at the mercy of the Samurai clan. Of cause a strongwilled person has revolted, but even now such bad custom can be recognized for the minority, the class consisted of a grave digger, a butcher, a prostitute and an Ainu. The author of Daibosatu- Toge shows not only an empathy to such people, but makes an assault on the gentlemen with a stoic ethics in simialr to that of a gentleman, so the latter feels his shame as he reflects himself in a mirror. It may be asserted as a literay device, yet I discern it his anarchism when he had acquainted with Kotoku and his comrades in his youth.

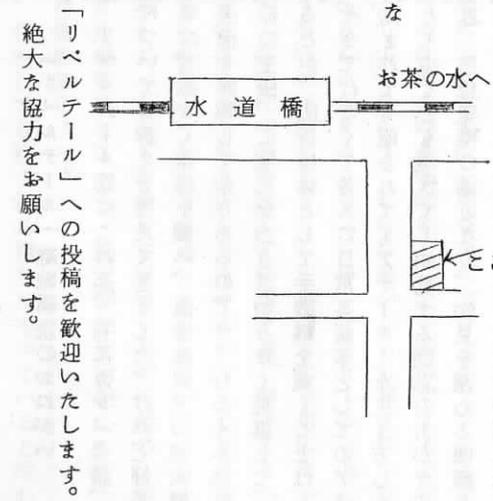
Otama-san appears with a shaggy dog and sits on a rug, then accompanying a Shamisen (a Japanese palalaika) begins to sing a song of Mano Yamano Uta, a moral song of Buhddism, sorrowfully.

Yube Asitana Kaneno koe In the morn and eve
Jakumetsu Iraku to hibikedomo ds the joy of enter
Kiite odoroku Hitozonashi ing Nirvana/ but no
one is surprized
Hanawa chiritemo Haru wa hiraku to hear it.
Toriwa Furusue kaeredomo
Yukite*kaeranu Shidenotabi. The flower falls

to bloom in the spring/ the bird flies to his old
nest/ but no one returns from his death journey.

☆編集室へでるのは楽しくもあり、苦しくもある。空きページを埋めさせられるのだけでも今のところ要訳でやっているからツジツマは合う。大切なのは水準の向上だ。質の転換だ。外に向って眼を開こう。自閉症はよくない。来年は論争を期待します。(はしもと)

リベルテール・サロン
水道橋東口下車徒歩2分「コージ」
毎週火曜日 午後六時より八時頃まで
どなたでもどうぞ。



「リベルテール」時間割

十二月十八日 本年最後のコージの集まり

十二月二十一日 忘年会・水道橋「庄や」本店

一九七五年一月十四日 コージの集まりを再開します。

毎週火曜

Y. Hashimoto

As a coeditor of this organ, I will write sometimes a short article from now on.

December is the last month of the year. Tempo of the scientific age is so swift as many events have passed around us and fallen into oblivion leaving us far behind. Thus we have meager chance to touch upon an event. The difference of historical conscience between a Japanese and an European is that the former lacks eschatology and see the time a circle. The year goes round in four seasons, while our life circle is also divided into four periods, childhood, youth, manhood, and the old age. So far as this, it does not differ at all. But a Japanese conscience maintains that the year continues without end or interruption. Then the time is often understood as a metaphor of a river. We say "The time flies like an arrow" "You can not say the same water of the river in which you have put your foot" The Greek sage taught us "PHANTA KORREI" This sentiment is traditionally represented by Buddhism in Japan. I will cite an example.

Kaizan Nakazato (1885-1944) was a socialist in his youth, and contributed his articles to Heimin Shinbun issued by Kotoku and Sakai during 1903-1905. After the high treason affair of Kotoku in 1910, he turned his talent into a route of literature, and continued to write a novel "DAI BOSATSU-TOGE" for more than 20 years. The hero of the novel is Ryunosuke Tsukue, a son of the instructor of the art of fencing in the country. Because of his vain glory, he lost his status as a gentleman and wandered around in the low class of the people. Despite melodramatic situations, the author provided for him nihilism and blindness towards political stand in those days, i.e. from 1910 to 1930. Then Nakazato kept his anarchy in the movement of the country folks and aloof from the authority for his life.

He introduced in a scene of the novel rigorous cast system in Japan.